

平成 29(2017)年 2月 6日  
在ベネズエラ日本国大使館  
附属カラカス日本人学校発行

目指す児童生徒像 よく考える子 思いやりのある子 進んでやりぬく子 強くたくましい子 日本もベネズエラもよく知る子



■ ■ ■ 校外学習で、エクスパズーに行きました！ ■ ■ ■

1月31日(火)に、小学部4～6年生は動物園に校外学習に行きました。自分でえさをあげたり、動物のスケッチをしたりしました。今週は、小学部1～3年生がトポテプイへ校外学習に行きます。

カラカス日本人学校をもっともっと知り、もっともっと好きになるために…(その151)

カラカス日本人学校はみんなの大切な、大切な宝物です！ NO. 46

今回も、西岡裕知先生の「カラカス太鼓」創設の頃の話、その5回目、最後です。今から20年前に、当時の先生方や関係者、児童生徒達が情熱の全てをぶつけた「カラカス太鼓」が、今も続いて演奏されていることの「奇跡」、思いは必ず伝わる、心は心ある者によって引き継がれる、夢は必ず次の者の夢となる…そんなことを改めて思いました。西岡先生貴重なお話を有り難うございました。この話は今も続いていますよ。安心して下さい。

■ **カラカス太鼓ができるまで 思い出すまでに…** ■ 当時は全校児童生徒で70人ほど在籍していました。中学部生も15人近くいたように思います。20周年を機会に、全校が一緒になって取り組める活動を創設したいという方針が出されました。はじめに和太鼓ありきではなく、ブラバンドなどいくつかの案が出されました。その中で和太鼓に決まりました。日本のアイデンティティがあり、他校や現地の人との交流で日本の文化として紹介できるという点がポイントでした。しかし本格的に太鼓指導をしてきた者はいなかったため、1年半後の20周年記念行事の日に本当に発表できるかが非常に不安でした。曲もまったくありませんでした。既存の曲を日本から取り寄せて演奏するというのも考えましたが、小学校1年生から中学生までと一緒に演奏するという本校の実態に合っていないので、自分たちで作曲することにしました。前述したように趣味で音楽に親しんでいて、学級でリコーダーを演奏するときにクラシックの名曲をリコーダーで吹けるように編曲したことはありました。しかしゼロからの作曲は初めてでした。今思えば、若気のエネルギーでしょうか、なんという無茶なことをやったのだらうと冷や汗が出ます(笑)。ある程度曲が書けたら、太鼓部会のメンバーの意見をもらいながら完成させていきました。無謀な挑戦で完成したのが「アビラのひびき」でした。当時はインターネットがやっと普及し始めた時代で、YouTubeなどでいろいろな動画を見ることなどは当然できませんでした。日本とのやり取りはファックスでした。そういう意味では、日本とはまったくかけ離れた状態で生活や仕事をしていたので、自分たちで作ってしまう!!って思えたんでしょうね。今振り返ると、それはそれでよかったなと思います。当時非常勤で英語を担当されていたらっしゃった中野俊子先生(長い間カラカス日本人学校で教えていらっやいました。現在は帰国)が、「この学校の特徴は、派遣された先生方が、そのときできることを精いっぱいやろうとしていることだ」とおっしゃっていた言葉を思い出します。

日本からカタログを取り寄せ、予算の範囲内で見栄えが良く全校児童生徒が活躍できる太鼓の種類と数を考えて発注しました。ご承知のとおり物流の信頼性は低い国ですので、本当に太鼓が無事にベネズエラに届くか不安でした。実際に太鼓を見たときは無事に着いた!!と安堵したものでした。20周年記念式典は、太鼓が到着してからちょうど1年後に迫っていました。台まで購入する予算はありませんでしたので、手作りすることにしました。太鼓が到着するまでの間に、太鼓を置く台を作っておき、到着したらすぐに練習を始めたかったからです。私は工作の方面はまったくダメでしたが、美術専門の奥原先生が図面を引いて、町の木工所に製作を依頼して進めてくれました。実物の太鼓を見ることなく、カタログの数値だけで図面を引くことはすいぶん苦労されたと思いますが、びったりと安定した出来栄でした。竹、鉦、鉦、銭太鼓は手作りしました。鉦は町の溶接工場に依頼して、思いどおりのものを作ってもらいました。今考えると、日本では自分で溶接工場へ出向いてものを作ってもらうなんてことはめったにしないと思います。当時は、困ったら自分たちで何とか作るというスタンスでした。銭太鼓は、まだ楽器類が演奏できない小学部1年生2年生の子もたちが手に持って踊るために考えました。



練習を始めると横笛の音が出なくて苦労した覚えがあります。原理はフルートと同じなので、慣れるまでなかなか音が出ませんでした。太鼓の迫力を出すために、中学部と小学部高学年は太鼓に配置している関係上、笛は中学年中心のパートだったということも難しさの一因だったと思います。太鼓は音は出ますが、いい響きの音でたたくのに苦労しました。ご存知のように転出入が多い学校で、前述したように1年半に10人以上減ってしまっていました。新学期や新年度のたびに、転出に対応するためにパートの人数調整をする必要がありました。宮太鼓を2人の場合はこうなる、1人の場合はこうなる…と、案をいくつも考え検討して、少なくなっていく人数でも見栄えも音も上質に保てるように工夫しました。

(写真：日系人会主催「まつり」で太鼓を披露する教職員 提供：西岡先生)